
困った彼

蒼くない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

困った彼

【Zマーク】

Z2469B

【作者名】

蒼くない

【あらすじ】

学校で書記をする章一はいつも優しいけれども、屋敷に帰ると
セクハラなご主人になってしまつ。それでもなんだかモテている彼
の日常生活といふかラブコメです

prologue (前書き)

はい。初投稿です。

シリアルのかラヴァーメなのかわからないラノベっぽい小説が好き
です。という事で書いてみました。

まあ楽しんでもらえれば嬉しいです。

その日僕は母さんに連れて大きなお屋敷にいた。

母さんは出かける前に

「今日は特別な日になるから」

とか言つていたけど僕には何のことかさっぱりわからなかつた。屋敷に入ると母さんは出迎えてくれた男の人と話し込んでしまう。そうなると暇でしようかなかつたけど子供心に楽しそうに話す2人の会話に入れなくて僕はテーブルの上のケーキを食べていた。ケーキを食べてしまうと何もする事がなくなってしまう。仕方なく周りを見回していると一人の少女と出会つた。

僕は彼女に話しかけた

彼女と僕は年が近かつたし、彼女は聞き上手だつたから僕はいつの間にかいろんなことを話していた。

僕には友達といえる友達はいなかつたから、母さん以外でこんなに話したのは初めてだつた。

それは僕にとって今でも大切な思いであり、そして彼女は大切な存在だとも思つてゐる。

第一話

「…あてぐだわい章一さん。起きてぐだわい。もう朝ですよ
微睡むような眠氣の中でソプラノがかつた声が俺を呼んでいる。
そしてその声に合わせるように揺さぶられる体。
しかし彼女は気付いていないようだ。

そのソプラノがかつた声もそれにあわせて揺さぶられる事も俺を再び夢の世界へと誘おうとしている事を。

このまま微睡んでいいのだがそれだけではつまらない。
そうおもうと俺は薄目で彼女を確認すると、自分の体をゆする彼女の手を左手でつかみ無理矢理引っ張った。

「起きてください章一さん。起きてくだ…きやつ…?」

当然彼女の体はベッドに倒れ込み自然と互いの体が近づくことになる。

そして俺は右手で彼女の胸をつかむ。

むにゅ

そして俺は目を開けると彼女彩音に笑顔で挨拶をする。

「おはよう彩音。いい触り心地だ。」

柔らかな感触とともに彩音の顔がたちまち赤くなり、ぱっと俺の体から離れる。

「なつ…章一さん…！朝からセクハラはやめてください…それに早くしないと遅刻しますよ…！」

彩音は顔を紅潮しながら怒ったようにまくしたてると俺の布団を取り去る。だけれど彩音は怒つても全然恐くなく、むしろかわいく見えてしまつ。

そう彼女早川彩音は俺の屋敷につとめるメイド見習いであり、俺専属のメイドである。彼女は黒と白のHプロンドレスというまさしこ

く『メイド』といったよつた感じの服に身を包んでいた。そしてそれはかわいいけれど凛とした雰囲気を持つ彼女にぴったりだった。身内びいきというのを差し引いても彩音は十分に美人だ。

そして俺は再び彩音を引き寄せ抱きしめる。

「彩音。今日もかわいいね。」

そういうと彼女は一層慌てはじめ

「なっ、何を言つんですか章一さん！…」

とかいうと俺を呪こうとするので素早くベッドから起き上がり避ける「にしてもいつまで俺の部屋にいる気なの？いまから着替えるんだけど。あつそーか。俺の着替えが見たいのか」

そこまで言つと彼女はもう爆発しそうなくらい顔が赤くなつて

「しょ…章一さんのバカーつ！…」

と近くにあつた枕を投げながら出ていくのだった。

着替え終わつて居間に出てみると朝食の準備をしている彩音の姿が見える。

「おはよう彩音。いい匂いがするね。にしても祥子さんはやつぱりまだ？」

と後半苦笑混じりに言つと彩音の方もつられてか苦笑混じりに

「はい。母さんは朝弱いですから。」

と答える

そう彩音の母もここのメイドとして働いている。

だからこそ彩音がここでメイド見習いとして働いているのだが、祥子さんは極端に朝に弱くいつも起きてくるのは9時半くらいなのだ。その上謎多き女性で30代になつていてるくせにまるで二十歳前後のようになつて見えるし、十分に大人なくすにポワッとしていて凛とした雰囲気の彩音とは正反対だ。

まあどちらも美人であることは変わりないのだが。

他にもうちの家には何名かのメイドや執事などのお手伝いさん達が

住み込みで働いている。彩音はその仲で最年少で一番年も近いので俺の身の回りの世話をしている。

まあそうは言つても俺は自分でできることは自分でやるから彩音に任せることはないが。

テーブルの上に乗った朝食はご飯に味噌汁、焼き魚という和食だつた。

二人で席につき朝食を食べ始める。

彩音がつくる朝食はいつも食べているものだがいつも通り美味しいくて

「おいしいよ。やっぱり彩音の料理はいつも食べてもおいしい。」

とかいつも通りほめてしまつ。

「ありがとうございます。」

とか言いながら食事をとる。

なぜ朝起きてから両親に会わないかというと、俺は母さんの連れ子で今の父親つまり義父とは母さんが再婚して十年になるのだが未だにラブラブで十周年記念とかいうことでバリとかハワイとかにバランスで一年間は行っているのだ。

全くこの年になつても未だにラブラブというのもどつかと思うが仲が悪いよりはいいし、旅行に行つておおかげである程度の自由も認められているのだ。

さてご飯も食べたことだし今日は何をしようか…

「映画面白がつたですね!!」

映画館を出ながら興奮した彩音が話しかけてくる

うん、喜んでくれて何よりだ。

今日は休日だし欲しいものがあるから買い物を手伝つてと言つたのは祥子さんが起きてきて3人で談笑していた時だつた。

祥子さんは気を利かせて用事があるからと言いながら俺にウインクをしてくれたがデートじゃないです。だいたい俺と彩音は付き合つ

てないし、今日の田舎はいつも身の回りの世話をしてくれる彩音へのささやかなお礼のつもりだ。

買い物を終えたて食事をして何したいと聞くと彩音は映画館に行きたいと言つた。

恋愛映画を妙にこだわったのはさすがと驚いたけど、まあ女の子だし当たり前だな。

帰つ道を歩いてころと彩音が決意を決めたような顔をして聞いてくる。

「今日は…どう誘ってくれたんです？」

「どうよつか…本当の理由を話すのもやだし、はぐらかそづ。
「ん、買いたいものがあったからね。それに一人で行くのって寂しいじゃん。」

そう答えると

「…でも、あれってすぐ終わる買い物じゃなかつたですか。学校の
帰りに寄ればいいような。」

バレてしまつたか。

「…本当にさ、いつも彩音に会ういろしてもらつてるから自分なりにお礼をしたかったんだ。」

そういうと、彩音は少しがつかりした感じで答へる。

……何を期待してたんだろうか。

「…どうですか。でも私は全然迷惑じゃないですし。章一ちゃんのお世話をするのは楽しいですよ。」

彩音は続ける。

「それに今日はとても楽しかつたですし、章一ちゃんのメイドで良かつたと思います。」

うそやつぱり彩音はとてもこゝナだと思ひ。

…なんだか照れくさかつたけど彩音がいてくれてよかったです。

「そう言つてもうらえると嬉しいよ。これかもよひじへ彩音。」

「はい、章一さん。」

第一話（後書き）

はい。

いきなり章一と彩音がデートみたいなことになつてます。
しかしこの2人付き合つてはません：

次回から章一の悪友とか美人の生徒会長とかなんか定番な人たちが
でてきますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2469b/>

困った彼

2010年10月18日15時13分発行